

知能検査を通しての幼児教育の推進

長崎市立長崎幼稚園

山口 菊代

.....私の園の研究・組の研究.....

(一) 序

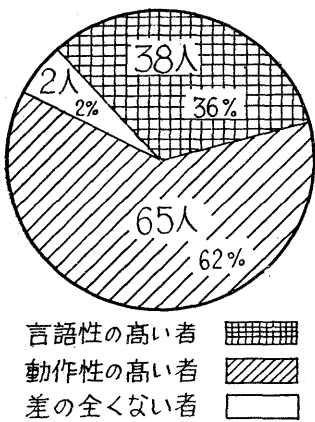
- ① 幼児の生活は未分化であり総合的活動をしていることは万人認めることである。したがってその指導に必要もない。したがってその指導の上である一つのことには片寄った教育をなすべきでないことはもちろんである。
- ② 知能検査も子どもを導く一参考資料であり手段とはするが、検査に現われた指数によって子どもの能力を決定するものではないことも一般的に認められたことである。とくに幼児は検査時の情緒や身体的状況、検査者の態度によってはなはだしく左右されることはいうまでもないことである。
- ③ なお幼児を対象とした教育においては、先生や親は教えるというよりも、幼児の心身発達の助成者として精神的環境として働くことが「幼児の健やかな成長」のため最もふさわしいことと信じており、いかにして望ましい環境を作るかを見出したかったのである。すなわち子どもたちのよき環境としての両親や先生の努力とだが、ただこの結果によって私どもの日々の教育の実際が反省され、少しでも科学的な指導を進めることができたという希望をもって検査結果の検討を試みた。
- ④ さらに日日の実際教育において、大きく反省を要することは、子どもにいつも接している母親や先生はあまりにもふれ合いが多いため、ついなれなれしくなり、またその子の一方的事例が浮かび上ってこの子はこうだ、ああだと決定し過ぎる傾向があることであろう。したがってその導きにもしぜん観念的取り扱いをすることが多くなるので、正しい環境を作る心構えと実際指導を、より適切にする方法的研究の一端として、知能検査を活用することを試みたのである。
- ⑤ 私どもの園では、前から田中B式や鈴木ビネーの知能検査を実施していたが、幼児対象の検査はなかなか難しく、いろいろと教育的検討をするのに困難を感じていた。幸い今年(ヴェクシユラールビュース・テストの幼児WISC)を実施してみた。しかし全園児がWISC

検査を受ける年齢に達しておらず、一〇五名(男五〇名、女五五名)で数が至って低く、結果の集計も見本数としては疑問はあるが、この点もご了承願いたい。

⑥ W I S C は、言語性と動作性の検査に分かれており、その差の状況により、またその差に大きな変化を認めないにしても、指数上層の部、下層の部など、すべての子どもがそれぞれ個人差をもっており、その個人差がいかなる環境によって現われるか、また個人の長所なり、短所なりにしたがった個人指導に役立てるための資料を見出すためのささやかな努力である。

(二) W I S C 検査結果についての考察

- ① 知能段階別結果分布の実態
- ② 言語性と動作性の比較と指数考察
- A 比較実態
- B 指導の考察
- ・この調査より結論されることは「幼児期は言語性より動作性が高い」といえるこ



知能段階	IQ項目 知能指数	性別		言語性IQ		動作性IQ		合計IQ	
		男	女	男	女	男	女		
最優	130以上	1	1	2	3	1	2		
	優	3	2	8	1	5	1		
中上	110~119	4	5	9	5	9	6		
中	90~109	33	26	20	29	30	31		
中下	80~89	8	15	9	14	2	9		
劣	70~79	1	5	1	3	3	5		
最劣	69以下	0	1	1	0	0	1		
合計		50	55	50	55	50	55		

調査人員 男50名 女55名

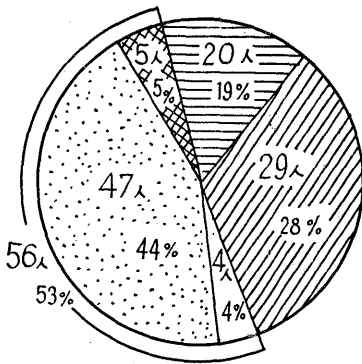
とである。すなわち教育学や心理学の示す通り「幼児期の教育は言語を通してなすよりも動作、作業を通してなすこと」が適当であることがはっきりする。

昔からいわれたように「口での教育指図でなく行動的具体的指導がいかに大切であるか」がこの結果からもうなずけるのである。環境としての母親なり先生はこのことによく着眼して、口での抽象的な教育を少なくして、行動を通して行動での具体的な指導を本態とすべきことを、考えなければならぬと思う。

しかしこの検査を通してその反面の検討もする必要がある。動作性と言語性との比が大体2:1の割合をもつという幼児期の成長発達の状態である。低い生活をひき上げることも教育の一分野である。ことに民主社会における言語生活の助成は重大に考慮されねばならない。

子どもはよく片言まじりで夢のような話をする。ことに何か一つの問題にぶつか

るとおかあさんたちの忙しい時間でもかまわずつきまとしてお話相手を求めることがある。そのとき私どもはうっかり「うるさい」を出さないか。「うるさい」が子どものよい環境か否かを考えてみたものである。今に生き過去、現在、未来の時間的連繋のできにくい幼児期においては子どもの求めたせつな今の問題を失うことなく取り上げ、活かしてやることが望ましい環境としての先生なり、親なりの大事な場面である。



図表の説明

区分	指数区分	園内での子供の状態	指導上の問題点
指数的の高い者	言語性の高い者	特徴をもつ	言動の差11以上26までの者
動作性の高い者	言語、物作の平均された者	特徴を見せない	49までの者
両者が平均やれ指数優以上の者	両者が平均やれ指数優以上の者	特徴が現われる	言動の差8から10までの者
指数劣以下の者	指数劣以下の者		

③ 知能指数の現われと指導考察

A 指数実態の比率

B 言語性の高い者についての考察

- ・内にはいった子どもの個人を見て、平常において教師の行動観察から一般的にいえることは、口達者でわがままな点が多く見られ、不平やにくまれ口や、大人びた言葉をよく使う子どもが含まれている。
- ・大人びた言葉を使うため、親は子どもをすぐれた者と認める場合が多くなる。
- ・口と手の調和が適度でないため、生意気で子どもらしくないように見受けられる場合が起る。
- ・作業をさせる。
- ・作業を逃避させないように助成する。
- ・先生や親の手伝いをさせる。
- ・土いじりをさせる。
- ・幼児らしい朗らかな生活をさせる。
- ・子どもの中にとけこんで、生活全般についてあたたかく導く。
- ・保護を必要とする友だちを与える。
- ・その子の長所を正しく他に認めさせる。
- ・抵抗のある生活場面を与える。
- ・家族の者が子どもを正しく見る。
- ・不必要な援助の手を払いのける強さをもたせる。

・自分のことは自分でさせる。

C 動作性の高い者についての考察

・内にはいった子どもの個人を見て、一般的にいえることは内向的傾向を見せる子どもが多く含まれている。

・口べた、だんまりやが多い。

・さらに言語性の高い子どもに見られなかった現象として、二九人中優以上の指数を現わした者四、境界以下の指数を現わした者三、計七の特殊現象が出ている。

指導上の留意点

・子どもの生活に心的な圧迫を加えないように常に気をつける。

・親は教育効果、結果を急がないように努める。

・朗らかさをもたせるようにする。

・動作を通して共動生活に自信をもたせる。

・お話相手をして上げる。

・失敗したとき叱らない。

・新しい経験場面に直面したときやさしく見てやる。

D 言語性、動作性の平均された者について

の考察

・五六人で全体の五三%が平均された位置にあつて、全圍平均よりやや高位にある。

・平均されているとはいへ、その中五%は境界線以下児、四%は優児で、特殊な指数を現わしているから、四七人四四%が平均された子と見られる。

・言語性、動作性に大きな開きがないだけ、特徴がはつきりしないときが多い。

指導上の留意点

・調和されているため、問題を起す場面が少なくなりがちとなるから、いつも活気をもつよう新しい抵抗と活動を持たせる。

・平均はされていても、知能的優劣は各個人によつて違うので、綿密に観察して導く。この段階の子ども数の最も多いことを常に考慮して、どの子にも指導の目を向けるよう気をつける。

E 指数優以上の者についての考察

九名
男六
女三

内容	本園%	全園平均%
計	八・三	八・九
優	五・七	六・七
最優	二・八	二・二

・さらに言語性動作性の関連について見れば、

平均され た者	動作性の 高い者	言語性の 高い者
四	四	一

優児と見られる者にも指数の上で、言語動作の不調和な問題をもっている者があ

る。

・優秀児は組の中では全般的に目立っている。

指導上の留意点

・親や教師は特別児としての扱いをしないよう努めることが最も大切である。

・子どもは他人より優位を感じると自慢する傾向を持ちやすいから、パーソナリティーの問題にとくに注意を要する。

・最優秀児については家系的疾病の有無を

よく調べて明るさをもたせ、常に健康面に注意を払ってやる必要がある。

F 指教境界線以下の者についての考察

・九名
男三
女六

内容	本國%	全國平均%
最劣	〇・九	二・二
境界	七・六	六・七
計	八・五	八・九

・言語動作の関連について見れば、

言語動作の平均された者	動作性の高い者	言語性の高い者
五	三	一

・放任的家庭に育った者が含まれている。
指導上の留意点

- ・最もいたわりと愛情をもって見守り導く
- ・家庭との連絡を密にして、とくに母親と教師が親しむことが大切である。
- ・その子として最もすぐれた点を見出したとき、みんなに認めさせる。
- ・劣等感を持たせないよう明るく助成することに努める。
- ・親しむ機会、お話の機会をたくさん持つようにする。

・身体的ふれあいのおりを多くもつようにする。

・乱雑な行動にならないよう注意する。

・積極的に自分の能力を發揮させるよう努めさせる。

G 平生の行動観察と大きな結果の開きを現わした者の考察

・事例一

言語性(低)動作性(高)の開き四九をもつ平生の行動はよい子と認める。

指導上の留意点

- ・抽象的思考や概念的方面がおくれたと見られるのでこうした態度を培う場を作つてやる。したがって園内の友だちとだけ交流でなく、近隣社会の友だちとの交渉をもたせる。
- ・事例二
- 言語性、動作性に開きはないが、劣線にある平素の指導によって今少しく引き上げられるように見受けられる。
- 母親も子どもも気が強く見受けられる。

指導上の留意点

- ・すなおさをもたせる。
- ・激励でなく、指導に力点をもつこと。
- ・右事例によっても親や教師の観念的子どもも見方取り扱いを反省して、知能検査を教育に活かすよう努めるべきと思われる。

(三) 結語

- ① 子どもの成長促進の一方法としての知能検査を通して、以上の通り区分してその長所、短所、位置などを検討した。
- ② どの子どももいろいろの環境によって問題をもっていることを発見し、その指導面を考察した。
- ③ 子どもたちが成長発達の途上において、多くの問題をもつことは当然である。
- ④ 親なり教師なりまた社会人なりは、各子どもについての問題をその子がよりよく発達するよう、彼らの適当な環境としての働きをなしたいと希望してやまない。
- ⑤ 幼児の教育においては明るさと愛情の真意をもって導くことが最も大事である。